

# 大きく育ったチンゲンサイは「絆」が育んだ復興の証

名取市で農業を営んでいた桜井久一郎さん・さと子さんご夫婦は、東日本大震災の津波で自宅や農地が流される被害を受けた。(有)蔵王グリーンファーム(福岡八宮)の菊地英明社長と30年来の友人であった桜井さんは、白石の地でチンゲンサイを栽培することを決意。絆が育んだチンゲンサイは大きく育ち、桜井さんたちは一歩一歩、復興への道を歩き出している。



## 名取の農家が白石で再起

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた名取市下増田の北釜地区。仙台空港東側の海沿いに面したこの地区は、60ヘクタールの土地にビニールハウス600棟が建つ、ハウス野菜の生産が盛んな土地だった。特にチンゲンサイは、仙台市場で約8割のシェアを占めていた。同地区には約120世帯、約400人が生活していたが、津波で家屋や農地のほとんどが流出。54人が死亡、4人が行方不明という甚大な被害を受けた。

に浸水。連絡網はすべて途絶え、空港の土産品を食料にして過ごした。行政区長を務める桜井さんは、震災の翌日、空港に取り残されている人たちがいることを一刻も早く伝えなければと、名取市役所まで水につかりながら歩いた。途中で、変わり果てたまちの姿に愕然とし、「しばらくは眠れない日々が続いた」と、当時を振り返る。

避難所生活を送りながら桜井さんは、「もう何もできない」とすべてをあきらめかけたこともあった。しかし、「このままでは何も変わらない」と農業での再起を決意。そんな時に30年来の友人であった菊地社長から、「白石で一一緒に頑張ってみないか」と声を掛けられ、白石の地で「もうひと踏ん張りしよう」と決めた。

白石で農業を再開したのは桜井さん、高橋茂信さん、高橋晴彦さん、星文夫さん、森年昭さんの5人。7月から5人は、仮設住宅から白石まで片道40分の道のりを1時間かけて通い、土を起すことから始め、ビニールハウスの建設を進めた。最

初に植えた苗は思うように育たなかったが、二度目の挑戦で苗は大きく育ち、出荷できるまでになった。

大きく育ったチンゲンサイは「絆」が育んだ復興の証。桜井さんたちは「絆」に後押しされ、復興に向けて前に進む。

8月に2棟であったビニールハウスも12月には32棟。新たに鈴木正義さんや桜井さんなどの家族も仲間に加わり、3月までに122棟まで増やしたいと意気込む。



1\_震災後の北釜地区 (PHOTO:名取市) 2\_ガレキが撤去され、広大な更地に姿を変えた北釜地区。3\_高橋茂信さんが避難した北釜集会所。避難誘導をしていて津波に遭い、屋根へ駆け上がり、津波は屋根下10センチに迫った。

# 白石しらゆり会手話サークルが 厚生労働大臣表彰

11月25日、「白石しらゆり会手話サークル」が、宮城県庁で厚生労働大臣表彰を受けた。手の動きで言葉を伝える手話は、耳の不自由な方にとって大切な伝達手段である。同会は、その手話を学びながら活動を展開。できることから始めて活動を続けてきた結果、人と人の心をつなげている。



厚生労働大臣表彰を受け市役所を訪れた後列左から大槻桂子さん、荒木桂子さん、前列左から大森啓子さん、山田茂子さん、寺島道子さん

## 耳の不自由な人たちのふれあいを深めたい

この日、同会のメンバーが市役所を訪れ、太斎副市長に厚生労働大臣表彰を受けたことを報告。太斎副市長は「長年の功績が認められた受賞で、市にとっても大変うれしいことです。これからも活動を続けてください」と同会の活躍をねぎらった。同会代表の大森啓子さんは、「これまでたくさんの人たちに支えられてきました。こうした人たちに支援していただいたおかげです」と話した。

「白石しらゆり会手話サークル」は、昭和61年3月に白石市で行われた宮城県手話初級講座(主催:白石市社会福祉協議会)を修了した3人が、「耳の不自由な方々とのふれあいをもっと

深めたい」と昭和62年3月に設立。聴覚障がい者をとりまくコミュニケーションの障壁を取り除き、手話を通じて耳の不自由な人たちの立場に立って、同じ目線で互いに理解し合い、支え合いながら手話を学ぶこと、さらに、障がいを持つ人たちとのふれあいを深めることを目的に活動を行ってきた。現在の会員は23人である。

## 学びを実践

活動の基本は、耳の不自由な人たちを交えて定期的に行ってきた、手話を学ぶための「学習会」。毎週水曜日に、同会発足時から続けてきた。学びの実践は、福祉まつりなどの行事で行ってきた「手話通訳ボランティア」。これらの活動は、耳の不自由な人たちの社会参加に大いに貢献してきた。

また、平成10年から「障がいを持つ人たちとの出会いやふれあい」が理解につながる」と、毎月、第1・第4木曜日に交流の場「ふれあいサロンしらゆり」を開始。「ボランティアからパ

ートナーシップへ」の合言葉の下、菓子作りや季節ごとの行事などを行うとともに、「手話を学びたい」という地域からの要望に応え、平成14年から市内の幼稚園や小中学校、高校などへ出向き「手話教室」も始めるなど、学びを実践するとともに普及活動も行ってきた。

## いのち輝いて、みんな違って、みんないい

同会のこれまでの活動の中で最も大掛かりなイベントであったのは、「手話劇公演」。昭和62年から平成18年まで毎年欠かさずに開催してきた。脚本から衣装、道具や宣伝ポスターの準備に至るまで、すべてが手作り。そのため、公演前の約5カ月は、週5回、練習や準備に明け暮れることもあった。演劇の専門家不在での手話劇は、並大抵の苦労でできるものではない。

平成19年からは、毎年テーマを決めて講座などを開催する「しらゆりハートフル福祉講座」を開始。同会の活動は、さらに大きく広がっている。大森さんは「耳が不自由な人

たちへの理解を深めることから始めた活動でしたが、今は障がいを持つあらゆる人々たちに対する「心のバリア」をなくすことが目標です」と話す。そんな大森さんたちが会の発足以来掲げているのは、童謡詩人・金子みすゞさんの代表作「私と小鳥と鈴と」に記された言葉を一部引用した「いのち輝いて、みんな違って、みんないい」という言葉である。

「白石しらゆり会手話サークル」は、障がいを持っている人々や高齢者、だれもが地域の中で支え合い、温かく暮らしていける地域づくりを目指し、これからも活動を続けていく。必ずや共感を呼び、支援や応援の輪が広がると信じて。



第51回宮城県母親大会で「かめっこくらぶ」のオリジナルソングに合わせ手話を披露する大森さんたち